

いよいよ6月です。いよいよというのは、いよいよ運動会の月だからです。4月に新年度がスタートし、ばら組さんがばら組さんらしく、すみれ組さんがすみれ組さんらしく、そして、さくら組さんがさくら組さんらしくなるのが、力を発揮するのが、成長するのが運動会だからです。もも組さんは、まずは出場すること自体に意義があります。運動会での子ども達の晴れ姿をどうぞお楽しみにしててください。

話は変わります。5月中旬に、幼稚園関係の出張で、駅前に行きました。混雑を予想していましたが混雑していなかったのが、始まるまでちょっと時間がありましたので、本屋さんに行きました。その本は、けっこう目立っていました。ちょっとページをめくってみました。「今更」と思ったのですが、「これも何かの縁」と思い買うことにしました。その本のタイトルは、『何のために「学ぶ」のか』です。「中学生からの大学講座1」で、桐光学園+ちくまプリマー新書編集部・編 です。発行所は、株式会社筑摩書房です。

私自身、十分に読み取ることができなかつたためでもあります。ここに「何のために学ぶのか」の答えを書くことはできません。でも、「はっとした」箇所があったので、はっとしたところを抜粋してお知らせします。

生まれた直後は誰もが天才である

～ 実は、すべての人間は天才的な能力を持って生まれてくるのである。ほとんどすべての子どもが例外なく、素晴らしい記憶力、素晴らしい感覚力を持っている。～ ちなみに、生まれたばかりの赤ん坊の能力がいかに高いかということを示すいい例がある。それは「ことば」。ことばを知って生まれてくる子どもは一人もいない。しかし、一般的な育てられ方をしていれば、40カ月の間にいちおうはことばを理解し、使えるようになるのである。その間、「ことば」というものを教える先生がいたのか？ 実のところ、いないに等しい。赤ちゃんにとってどういうことばが一番大切かということを考えながら教えている親は、ほとんどいない。～ たった40カ月ぐらいの間にことばをマスターする。ほとんど例外なく言葉を覚える。

～ 小さいときのこのものすごい能力。それをわれわれは長らく見誤っていたのである。赤ん坊は何もわからない。知的な活動なんてぜんぜんできない。こう思い込んできた人間は大きな間違いを犯してきたことになる。さらにおどろくべきことに、われわれは頭の中に、自分なりのことばの“文法”をこしらえている。それは、たいへん細かく、複雑で微妙な文法である。赤ん坊の頃から～無意味なことばをたくさん聞きながら、その中から不要なことばを捨て、大事なものだけ拾って、自分自身の力で文法をつくりあげる。たいていの子がその力を持っている。死ぬまで持ち続けるけれども、それを自覚することはない。～ 世の中では、大学が一番重要な教育を行っているように思っている人が大多数だが、大きな誤り。たしかに、専門的な知識や特殊技術は大学でなければ身につけることができないだろう。だがそれは、人間として生きていくのに絶対必要なものではない。本当に大切なものは、遅くとも10歳くらいまでの間にわれわれの体に宿っていなければいけないのである。

4月28日にNHKBSで「ヒューマニエンス「三つ子の魂」小さな体のビッグバン」という番組が放映されていました。タイトルが気になったので録画しておきました。上記の本を読んでから気になって視ました。赤ちゃんの能力についていくつか紹介されました。その中で、人間は、乳幼児期から児童期にかけて最も言葉を習得するというデータが提示されました。なるほどと思ったのでした。

さて、せっかくですので、私は「何のために学ぶ」のかということ、自分自身のためでもあります。が、「並木幼稚園の子ども達（+保護者の皆様）」のためです。